

第2回協議の主な意見

項目	概要
知的障がい特別支援学校 (重複障がい)	<ul style="list-style-type: none"> ・知的障がいのある子どもたちに必要な専門的な教育が県内でバランスよく行き届いていると言えるのかどうか。 ・重複障がいのお子さんが増えている実態がある。知的障がいがあり、聴覚障がいもあるおさんは、知的障がいと聴覚障がいという考え方ではなく、重複という障がいの実態がある。重複であるということについては、高い専門性が必要である。 ・知的障がいと別の障がいを重複しているので、知的障がい特別支援学校で学ぶということよりは、例えば、知的障がいと肢体不自由の重複であると捉えることができる。重複障がいは、単独の障がいとは違うと考えれば、それぞれの障がいの専門性の上に、プラスされていく専門性が必要。知的障がいの学校には全て肢体不自由の部門をプラスするぐらいの勢いで専門性を確保するとよい。
分教室	<ul style="list-style-type: none"> ・できる限り地域で展開できる専門性の高い特別支援教育。これは、特別支援学校の配置と合わせて考えなくてはならない内容。 ・宮城県の「小学校の中に、特別支援学校の分校を置いている学校」では、設備も混在していたが、保健室、養護教諭は、何かあったらすぐに小学校の養護教諭が対応する体制をとっている。 ・「できる限り身近な地域で」という面では、分教室は条件を満たせるが、安全で専門性が高い、安心して任せられる分教室になっているかということ、保護者は不安を抱えている。分校に格上げをすることができないのか。 ・十分に施設設備面が整っているかということそうではない。職員体制の面でも分教室では、十分には配置できない。特別教室や運動するスペース等を保障して、小さい学校としてつくっていくことがよいと思う。 ・須坂支援学校の当初の期待や設置の効果はどうか。 須坂市が、「須坂の子は須坂で」と考えていた。初めは、備品も少なく準備が大変だった。現在は、中学部ができて教育が充実してきた。施設面では須坂小学校の1階を使用している。 体制、人材の面では、当初、長野養護学校から先生が異動し、専門性が保たれていた。人事異動があると人の入れ替わりがあり、専門性の担保が難しい。新しい風が入ることで、さらに専門性を高める必要がある。 ・分教室を設置する目的の一つに、同世代の友と生活を共にすることがある。地域で受け入れられ、同世代と学べることを最大限生かすことが大事。 ・専門性の高い職員がいる必要がある。どう担保するか課題。
高等部分教室	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部分教室の就労率が高い。分教室で一般企業に就労するための学習が充実すると、一般企業も雇用がしやすくなる。職場実習をして求人し、雇用に繋げたい。

<p>県下2校体制の特別支援学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 肢体不自由については、肢体不自由特別支援学校が配置されていない地域は、知的障がい特別支援学校に就学しているという実態がある。これは、専門的な教育が保障されていると考えられるのか。 ・ 知的のお子さんに必要なダイナミックな活動と肢体不自由のお子さんに必要な個別の丁寧な指導、活動に対する時間、触れさせるもの見せさせるものの違いを考えると、それぞれの教育課程を用意した方が効果が上がると考える。 ・ 肢体不自由の特別支援学校については、肢体不自由特別支援学級が充実しているという事であれば、肢体不自由の特別支援学校を置く必要はない。 ・ 地域の中に、その教育をカバーできる学校がないので遠方から通ってくる又は、知的障がいの特別支援学校に就学しているという実態。 ・ 実際に肢体不自由特別支援学校へのアクセスの問題で課題があるという話がある。 ・ 小諸、飯田に肢体不自由部門を設置するべき。 ・ 盲・ろう学校の児童生徒数は、減少傾向だが、視覚障がい、聴覚障がいの子どもが減ったと解釈できるわけではなく、地域の学校に行っている。 ・ 盲ろう学校では、適切な教育が受けられるように、小中学校へのサポートやサテライト教室で支援を行っている。 ・ 病弱養護学校の児童生徒について、東長野病院は外来でフォローしている。肢体不自由の方や聴覚障がいの方もいて、様々な特性のある方がいる。障がいの区分はクリアーになりにくい。 ・ 若槻養護学校の役割として、重度重複障がいのお子さんの教育も担っている。近くの長野養護学校には、自宅から通学されているお子さんがいる。重度重複障がいの児童生徒について一カ所でまとめて教育していくこともできるとよい。
<p>副学籍</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 副学籍の制度は、当たり前のことを行っている。地域の方もそう思っている。専門的な教育を受けるために特別支援学校に行っているだけのこと。 ・ 地域の子どもということ成人式にも呼ぶし、同世代の仲間と一緒に。冷静に考えると当たり前。なぜ、増えていかないのか。広がってほしい。 ・ 検診では、一日かけて本校に行かなければならない。変更できるのであればやればよい。 ・ 中沢小の子ども達は、はなももの里の子ども達と遠足に行っている。そういうよいことがなぜ広がっていかないのか、現場の声を聞きながら考えていくことも大切。

永松先生より（コンセンサスを図りたい点）

- ・ 長野県の子ども達の一人ひとりのニーズに対して専門的な教育がしっかりと届くような県内の特別支援学校の機能であり、配置であること。
- ・ 「インクルーシブ社会の実現に向けて推進する」という文脈で説明できる特別支援学校の整備であること。
- ・ 専門的な教育を用意するだけでなく、地域の教育から切り離されず、地域自治体の積極的な参画と地域の力を借りながら推進していかれること。